

これからの 女性建築士の役割

平成27年度 第25回全国女性建築士連絡協議会 開催報告

大会テーマ

未来へつなぐ居住環境づくり——次世代へ伝えたい、こと・もの・暮らし

開催日…平成27年9月25日・26日

会場…国立オリンピック記念
青少年総合センター

特集のことば

永井香織 ■日本建築士会連合会 女性委員長

全国女性建築士連絡協議会(以下、全建女)は、平成2年に発足し、第25回目となりました。今回まで継続ができたのは、女性委員会の発足にご尽力いただいた初代女性委員長村上美奈子氏をはじめ、連合会会長や女性委員会担当副会長、各都道府県単位士会の会長と女性委員会(部会)、事務局など多くの関係者のご協力とご理解のおかげと感謝しています。

全建女は、女性建築士の活動報告や情報交換の「場」として、また各都道府県の女性建築士の交流の「場」の役割を担ってきました。25年前の建設業界は男女雇用機会均等法が施行されていましたが、女性の活躍の場としては、まだまだ多くの課題がありました。そのようななか、子育てをしながら、介護をしながら情報収集し、勉強を続けている多くの女性建築士の活動の「場」として女性委員会がありました。

現在、社会では女性支援活動が活発化しています。

そのなかでこの全建女は、初年度から「高齢者」や「子ども」の住環境をテーマに、コツコツと地域活動を積み上げてきていることは、時代に先駆けてアピールできる内容であると感じています。

東日本大震災の発生後、女性委員会では、震災状況や復興状況を東北三県などに毎回報告をいただいています。震災復興は時間がかかり、4年が経過したいまでも、当時から状況が変わっていないところが多く残っています。

女性は家庭があり、子どもがあり、介護があるなかで、すぐには行動を起こしにくい状況ですが、細く長く継続することはできます。「震災を風化させない」ことを基本に、防災意識を高め、現地の原発災害に関する活動へのサポートも続けています^[註1]。

さて、第25回では、これからの全建女を考えるという目的から、基調講演では女性委員会の発足時のことや、その思いを話していただきました。そして、それらを引き継いで「未来のくらしかた」をテーマに、20歳代から80歳代までの異業種を含めた女性を招いて、パネルディスカッションを開催しました。詳細はパネルディスカッションの報告で確認していただきたいので

註1 福島女性委員会「放射線対策住宅」への寄付活動



ながい・かおり
日本大学生産工学部准教授。日本建築士会連合会女性委員長、神奈川県建築士会



写真1 会場風景



写真2 会場風景



写真2 石崎和志課長(国土交通省住宅局建築指導課)による来賓挨拶



写真3 村松泰子理事長((公財)日本女性学習財団)による来賓挨拶

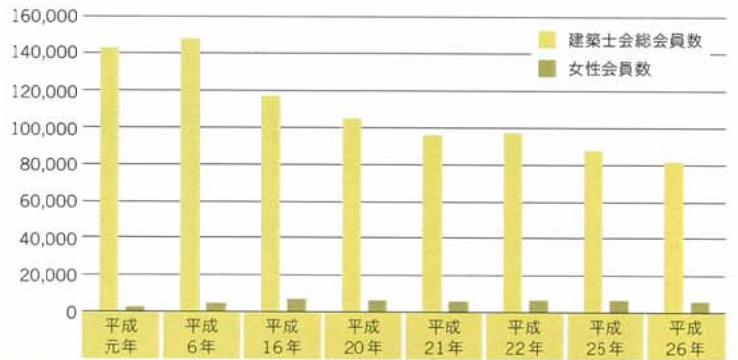


表1 建築士会会員総数に対する女性会員の割合

すが、時代とともに「くらしかた」も「住まいに対する意識」も、変化していることがわかります。

高齢者が50%以上の世の中がすぐ目の前に迫っているなかで、私たちが行っているバリアフリーやユニバーサルデザインの考え方はどうあるべきか、いま一度見直して欲しいと思います。

ソフトの時代と言われているなか、IT中心の世界だからこそ必要とされる、顔を合わせたコミュニケーションの重要性や、仕事と家庭を考えたワークライフバランスのあり方に関する本当の情報発信は、女性建築士の役割だと感じています。私たちの、時代に左右されずに継続してきた弱者に対する地域活動や未来を見据えた発想は、「女性だからこそできること」につながると考えています。だからこそ、各分科会でのディスカッションと、建築の枠を超えた「人の声」が必要として、発信しています。

これからの四半世紀に向けて、いま、私たちにできる新しいことを皆がひとつずつ行うことが、未来を変えきっかけになると信じています。

平成27年度 第25回全国女性建築士連絡協議会 アピール

- 1 私たちは、今回の協議会を通し、女性建築士の使命を考え、これからの四半世紀を見据え子供や高齢者が安心できる防災を強化した居住環境づくりの構築を目指します。
- 2 私たちは、今回の基調講演を通して、女性として社会進出を果たしている先輩の言葉をもとにこれから求められる「未来のくらし」を視野に入れた新しいくらしのあり方について取り組みます。
- 3 私たちは、震災復興報告の情報発信を通し、忘れない・風化させない・続けていくことを基本に私たちを取り巻く「こと・もの・くらし」を見つめなおし、これからのくらしを守ります。
- 4 私たち女性建築士は、性別や年齢、職種の枠を超えた様々な分野の専門家とのつながりの重要性を再認識し、これからの女性建築士の役割を次世代に伝えていきます。

会長・担当副会長挨拶

開催にあたり

三井所 清典

■日本建築士会連合会 会長



平成27年度全国女性建築士連絡協議会の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

昨今のテーマとなっている女性就業者の増加ならびに女性幹部の養成を目的とする、建築・建設のみならずすべての業界の活発な活動につきましては、皆様のご承知の通りでございますが、日本建築士会連合会では、各業界・団体の活動に先駆けて、女性委員会・部会を設立、それに伴い平成2年より全国女性建築士連絡協議会を開催し、今年度で25回目の開催となりました。

連合会女性委員会ならびに各都道府県建築士会女性委員会・部会の委員が長年継続して取り組んできた女性の視点から見た建築のあり方、建築のニーズや景観づくり、コミュニティ形成などの地域貢献活動に目を見張るものがあります。

地域創生が声高に叫ばれている今日、着実な成果を導き出し、建築および、防災・歴史・街なか・福祉の各まちづくりの視点から、各地域社会への貢献を果たしてほしいものであります。

継続は力なりと申しますように、これまで諸先輩方、皆様が取り組んでいる活動が明日の建築士会を支えていくこととなりますので、よろしく願いいたします。

何をめざすか

岡本森廣

■日本建築士会連合会 担当副会長



平成27年度、記念すべき節目になる第25回全国女性建築士連絡協議会を東京で開催するにあたり、日本全国47建築士会から女性建築士を迎えることができたことを心から喜んでおります。

今回は、特に25周年の意味に意義深いものがあり、社会情勢の成熟化や交際化、女性の社会進出等から連合会および単位建築士会の女性委員会は役割を終え、発展的に青年等の統合化など、次の展開に期待する必要性を語る会長も少なくありません。

この25年間の活動を総括するとき、女性建築士連絡協議会活動の蓄積がなされ、培われた知験・技術等を持って高齢者・障害者に寄り添い、住環境整備活動は社会貢献に直結し、地域社会から高い評価を得た成果は、如何様に検証されたでしょうか！

具体的に全国47建築士会・7ブロックにどのように展開され実を結び、加えて技術者として社会の激変に対応し深耕された知見と「見える化」する活動が、実感として感じられているでしょうか！

さらに、その時々参加者の方々、特に女性委員長等は、各々の建築士会で立つ位置はどうなったか、いま現在、技術者として如何様な活躍をなさっているかの検証は、今後を考える上で貴重な視点ではないでしょうか！

この全国女性建築士協議会、連合会・女性委員会で現在の差し迫った社会的課題に直面して、いま、そして近い今後、将来社会を展望して、解決する議論が深まり具体化し、各建築士会へ着実に展開されることを期待しております。

基調講演

全建女の立ち上げと居住環境づくり

村上美奈子 ■ 日本建築士会連合会 初代女性委員長
東京建築士会、計画工房 主宰

全国女性建築士連絡協議会25周年を迎えて、当時と今との関係、何が同じで何が違うのか、全建女(女性委員会)の組織と活動、そして、今後どのように考えて行けばよいかという視点で話したい。全建女は、特定の目的を持った組織というより、「場づくり」が主であった。個人が課題を持ち込み、それを皆で考えて解決する場をつくるのが目的で、それは今も同じと考える。

発足当時の女性建築士、女性就業者の問題として、婦人(母性)保護が雇用差別に悪用されるという実態があった。時間外労働の制

限、高所作業や深夜残業の禁止などの制限があり、女性の保護というより低賃金労働として、働く女性へ多くの悪影響を及ぼしていた。

この状況を打破すべく、当時は東京建築士会として、1983年に中曽根康弘内閣総理大臣へ「婦人差別撤廃条約」の早期批准に関する要望書を提出した。

その後は、雇用機会均等法が制定されるにあたり、総理府、労働省、建設省をはじめとした各省庁へ要望書を提出し、女性建築士の雇用差別の解消に取り組んできた。20代、30代の若い人の仕事の課題を取り上げることが

必要で、未だ不平等が根強く残っている。

現在、建築士会の会員は減少しているが、女性会員は少しずつ増え、女性の役員も増えている。会員数に見合った役職もいただいている。しかし、女性という視点がどこまで生かされているかという疑問が残る。

高齢化率10%であった当時、高齢化率が25%に達する社会へ向けた取り組みを行った。現在、高齢化率が20%を超えているが、20年後に高齢化率が40%に達したときを想定した視点でテーマを見ているか、実務者としての問題意識を持っているのか問いかけたい。

開催日…2015年9月25日(金)
13:55~14:35

会場…国立オリンピック記念
青少年総合センター 小ホール

全国女性建築士連絡協議会 25年の歩み

日程	開催回 場所	大会テーマ・出席者数 活動報告・講演・シンポジウムなど・分科会テーマ	出席者数
1990 (平成2)年 5月9日	第1回 東京	単位士会女性部会(委員会)設置推進 全国女性建築士連絡協議会の目的設定/【分科会テーマ】単位士会女性部会(委員会)設置の目的と必要性/設置推進上の阻害要因と対応策/ブロック女性建築士連絡協議会設置の目的と必要性/ブロック女性建築士協議会の設置について	出席者数…77名
1991 (平成3)年 5月9日	第2回 大阪	豊かさとうるおいのある暮らしを求めて —高齢化社会と女性建築士 【活動報告】高齢化社会とまちづくり/高齢化社会と住まい/【分科会テーマ】単位士会女性部会(委員会)設置推進について/ブロック女性建築士連絡協議会の現状報告/全体での2土会の活動報告を聞いて	出席者数…193名
1992 (平成4)年 5月14日	第3回 東京	生き生きと住み続けられる住居を求めて —高齢化社会と女性建築士 【活動報告】北海道住宅局住宅設計の指針作成に携わって/シニアライフの魅力的な住まい方を出版して/リフォームの事例報告/【分科会テーマ】女性部会(委員会)の設置状況と活動内容について/女性部会(委員会)の運営上の問題点について/ブロック協議会の運営について	出席者数…99名
1993 (平成5)年 6月10日	第4回 愛知	高齢者の一人暮らしを支える多様な住まい —高齢化社会と女性建築士 【報告】「高齢者の一人暮らし」に関する取材調査/高齢者支援の地域別取り組み/敬愛地における一人暮らしへの対応/高齢者が自ら選ぶ集住の暮らし/成熟したニュータウンの一人暮らし/伝統的文化に支えられた町屋での一人暮らし/産業構造に支えられた集住の暮らし/小さなコミュニティによる高齢者支援の複合的取り組み/【報告】「高齢者の一人暮らし」に関する全国女性会員へのアンケート調査/【分科会テーマ】高齢化社会と女性建築士について/女性建築士の職場環境について/単位士会活動について	出席者数…150名
1994 (平成6)年 6月1・2日	第5回 東京	女性建築士の地域における活動 【活動報告】産産社会を考える/親いのある通学路/地域に根ざした住まいと大工さんの調査/建築と子どもたち/【分科会テーマ】高齢化社会/地域・まち・環境/住まい/建築と教育(社会的参加)	出席者数…160名
1995 (平成7)年 5月25日	第6回 岐阜	人と自然にやさしい住宅づくり —自然環境との共生 【講演】「環境と共生する建築」野沢正光/【報告】「人と自然にやさしい住まいづくり」に関する全国女性会員に対するアンケート調査/【分科会テーマ】高齢社会/自然環境との共生/震災と住宅/女性建築士の働く環境	出席者数…150名
1996 (平成8)年 7月4・5日	第7回 東京	安心して住み続けられる住環境を求めて —女性建築士の地域活動 【講演】「行政における健康住宅への取り組み」建設省、厚生省、通商産業省/【活動報告】東京に住む—安全・安心ウオッチング/バリアフリータウン石川実現へ/環境共生住宅の研究/高齢者・障害者対応建築物調査および福祉のまちづくり条例設計マニュアル作成/花は咲かせ隊の進める高齢社会への取り組み/【分科会テーマ】健康な住まいPART-1/健康な住まいPART-2/建築と子供たち/バリアフリーのまちづくり/まちづくりへのかわり/震災後のまちづくり/住まいづくり/単位士会女性部会(委員会)の現状と問題点	出席者数…206名
1997 (平成9)年 6月20・21日	第8回 岡山	安全に、健やかに住み続けられる居住環境 —健康住宅と女性建築士 【シンポジウム】安全に、健やかに住み続けられる居住環境、小年真一郎、横田耕作、山下和良、増地秀夫、野崎理美/【報告】安全に、健やかに住み続けられる居住環境、についての全国女性会員へのアンケート調査/【分科会テーマ】健康住宅関連PART-1/健康住宅関連PART-2/環境関連/まちづくり関連/バリアフリー関連/建築と教育関連	出席者数…201名
1998 (平成10)年 7月24・25日	第9回 東京	女性建築士の地域活動 —安全に、健やかに住み続けられる居住環境づくり 【講演】「行政における健康住宅への取り組み」建設省、厚生省、通商産業省/【活動報告】北方型住宅の推進事業/高齢者施設の実況/富山県バリアフリーモデル住宅設計/平成9年度単発ユーザーセミナー/健康住宅展/斜面住宅地(十善寺地区)のこれから/【分科会テーマ】健康住宅関連PART-1/健康住宅関連PART-2/バリアフリー関連PART-1/バリアフリー関連PART-2/まちづくり関連/環境共生/省エネ関連/住まい関連/社会啓発関連	出席者数…253名
1999 (平成11)年 7月16・17日	第10回 宮城	安全に、健やかに住み続けられる居住環境づくり —次世代のための取り組み 【講演】「シックハウスの常識と対策」田辺新一/「住宅の換気と空気環境の安全性について」福島 明/「次世代省エネルギー基準と住宅」吉野 博/【報告】健康住宅から考える居住環境に関する全国女性会員へのアンケート調査/【分科会テーマ】健康住宅実践活動/バリアフリー/健康住宅問題/土会活動/地域に根ざした住まい/集まって住む/社会への働きかけ	出席者数…260名
2000 (平成12)年 7月21・22日	第11回 東京	地域の環境と共生する居住環境づくり —建築士としての地域活動 【講演】「住宅性能表示制度について」建設省/【活動報告】提案・これからのゴミステーション/こども・家・HOKKAIDO/やっぱり、まちに住みたいよね/継続する土会活動 女性建築士の集い—10年の歩み/くまもと青年会/健康11年の歩み/【分科会テーマ】環境と共生する住宅/地域で考える環境共生/健康住宅実践活動/高齢社会問題/少子化と住まい/集まって住む(コンタクト・コーポラティブ)/社会啓発および子供とまちづくり/継続する土会活動	出席者数…314名
2001 (平成13)年 7月13・14日	第12回 熊本	地域と共生する居住環境づくり —地球環境から考える 【講演】菅谷昌則、宮本哲郎、藤森照信/【パネルディスカッション】「地域と共生する居住環境づくり」宮本伸子、菅谷昌則、宮本哲郎、藤森照信、小谷節子/【報告】「地域と共生する居住環境づくり」に関する全国女性会員へのアンケート調査/【分科会テーマ】健康住宅問題/環境共生関連/土会活動関連/高齢社会問題/改正基準法関連/まちづくり関連/子供と建築/集まって住む	出席者数…248名
2002 (平成14)年 7月12・13日	第13回 東京	地域と共生する住環境づくり —さまざまな職域・地域で活躍する建築を担う女性たち 【活動報告】子供の居場所はどこにあるのか/「紙面イラスト」ボランティア/シックハウス症候群の実態調査とその報告/ユニバーサルデザインとバリアフリーデザインに基づく施設改修の実践/若松バンド—近代建築物の保存と活用のまちづくり/【パネルディスカッション】「さまざまな分野で活躍する建築を担う女性たち」村上美奈子、鍵野洋子、永島恵子、小田道子、大橋百合子、山口三智子/【分科会テーマ】健康住宅/環境共生/建築士制度と土会活動/高齢社会/法制度/歴史的建造物の保存と開発/子供・住環境・まちづくり/集まって住む	出席者数…317名



写真1 基調講演風景



むらかみ・みなこ
 (株)計画工房主宰。東京藝術大学建築科大学院修士課程修了。港区環境影響審査会会長、杉並区・北区都市計画審議会委員、墨田区景観アドバイザー、新宿区・渋谷区・杉並区・世田谷区まちづくり相談員。専門領域は地域計画、まちづくり、建築設計

女性の「ずれた価値観」「マイナーな視点」からの発想を育てることで、建築界全体がもっと立体的に評価されると考える。私の仕事の発想は「ずれた価値観」によるもので、「杉並の家」では日本建築学会作品選奨、「こども園ひがしどおり」では東北建築作品賞、「新宿区の住環境の整備」では日本建築学会賞をいただいた。

最後に、全建女の取り組むべき課題について話したい。未来につながるためには、全国から建築士が集まってここの全建女という組織をもっと活かすべきである。地域と東京中心の

考え方の違いなどをストレートに問題提起すべきである。個人ではできないことを社会的な発言に変えていくのが、全建女の組織を使うという考え方である。

女性の価値観では、家庭と仕事の優劣はつけがたい。男性とは違う判断力を持っているからである。まちづくりについては、女性ということで信用力がある。一方、男性も新たな視点を探していて、多様になってきている。どうやって活路を見出していかかが今後の課題と言える。

私は、2つの専門性で異なる視野が開けた。マイナーなところに新たな発想のヒントがある。

地域計画は、街と人との関係に着目している。吉阪隆正さんの生活者の視点に啓発され、そういう姿勢で仕事をしていたら少しずつ評価され、仕事が増えていった。地区計画のプロジェクトを行政とともにやり、今でも地方の都市計画の見直しなど、いつのまにか地域計画のエキスパートになっていった。建築の設計をするときも、まちづくりや地域計画の視点で設計している。それらが居住環境づくりという今回のテーマにつながるのではないかと考える。

歴代の女性委員長

1990~1996年	村上美奈子	2005~2008年	宮本伸子
1997~2000年	鍵野洋子	2009~2012年	定行まり子
2001~2004年	小谷部育子	2013年~現在	永井香織

2003 (平成15年) 7月11-12日	第14回 兵庫	地域と共生する住環境づくり —復興都市から考える「まちとくらしの未来像」 [アンケート報告] / [講演] 小林郁雄、立木茂雄、市川裕子 / [パネルディスカッション] 「復興都市から考える「まちとくらしの未来像」」小林郁雄、立木茂雄、市川裕子、有村佳子、青田良介、小谷部育子 / [分科会テーマ] 防災・まちづくり / 環境共生 / 健康住宅 / 建築士の再生生活 / 歴史的建造物の保存と開発 / 子供・住環境 / 高齢社会 / 集まって住む	出席者数...297名
2004 (平成16年) 7月16-17日	第15回 東京	地域と共生する住環境づくり —美しいひと・まち・くらし [活動報告] 公開シンポジウム「住みたい! 使いたい! 残したい! — 記憶をつなぐまちと建物 / 愛媛の木を使ったモデルハウス / 子供を対象とした「住まい設計ワークショップ」に関する活動 / ユニバーサルデザインの建物をめざして その1 — トイレ編」 / [講演] 青木伊知郎 / [パネルディスカッション] 森まゆみ、永井多恵子、小泉和子、富田玲子 / [分科会テーマ] 景観とまちづくり / 環境共生 / 健康住宅 / 建築士の責任 / 建築物の再生生活 / 子供・住環境 / 高齢社会 / 集まって住む	出席者数...350名
2005 (平成17年) 12月2-3日	第16回 香川	地域と共生する住環境づくり —身近な素材を未来へつなぐ [パネルディスカッション] 三宅正弘、中庭修身、戸塚元雄、津田光利、菊地隆一郎、岡川雄洋 / [分科会テーマ] 素材の伝承 / 被災のまちづくり / 健康住宅 / 建築物の再生生活 / 歴史的な建物とまちなみ / 子供と住環境 / 高齢社会 / 集まって住む	出席者数...277名
2006 (平成18年) 7月21-22日	第17回 東京	地域と共生する居住環境づくり —住まいの安全を守る [活動報告] 子どもをばくむ住まいづくり / みんなで作ろう! ドリームストリート ふくしまてくくお宝探検隊 / 建築と子どもたちワークショップ「ベンチ制作」 / 子ども住まいワークショップ / [講演] 村上慶裕 / [パネルディスカッション] 「住まいの安全を守る」小谷部育子、大久保麻子、大河内美保、加藤万理、正木恵子、村上美奈子 / [分科会テーマ] 住まいの安全 / 環境共生 / 健康住宅 / 建築士制度と土会活動 / 歴史的建造物の保存と開発 / 子供・住環境 / 高齢社会 / 集まって住む	出席者数...376名
2007 (平成19年) 7月13-14日	第18回 青森	地域と共生する居住環境づくり —自然とこだまする [講演] 工藤光治 / [パネルディスカッション] 「北のまちとくらし」月詠敬史、田中 裕、高松隆三、杉山隆子、島 康子 / [分科会テーマ] 素材の伝承 / 建築士制度と土会活動 / 健康住宅 / 建築物の再生生活 / 歴史的な建物とまちなみ / 子供と住環境 / 高齢社会 / 集まって住む	出席者数...269名
2008 (平成20年) 7月18-19日	第19回 東京	地域と共生する居住環境づくり —住みかえに学ぶ [活動報告] らいてうの家 / 女性建築士の集い2007 / 景観色色ワークショップ... in 山口県下関市 / 北九州市「女性のための市民建築大学」 / [講演] 大垣尚司 / [パネルディスカッション] 「住みかえ」定行まり子、大垣尚司、蓮上島洋、小渡佳代子、松井 薫、奥坂康人 / [分科会テーマ] 住みかえ / 建築ととりまく制度 / 健康住宅と素材 / 建築物の再生生活 / 歴史的な建物とまちなみ / 子供と住環境 / 高齢社会 / 集まって住む	出席者数...353名

2009 (平成21年) 7月17-18日	第20回 長野	地域と共生する居住環境づくり —建築における「環(WA)」を考える [講演] 吉田伸郎 / [パネルディスカッション] 高木直樹、市村良三、吉田伸郎、石川利江、出澤 潔 / [分科会テーマ] 循環型社会 / 建築ととりまく制度と建築士会 / 健康住宅と素材 / 建築物の再生生活 / 歴史的な建物とまちなみ / 子供と住環境 / 高齢社会 / 集まって住む	出席者数...405名
2010 (平成22年) 7月16-17日	第21回 東京	女性建築士の新たな出発 [講演] 宗田好史 / [パネルディスカッション] 平内節子、宗田好史、柳川陽文、村上美奈子、宮本伸子、定行まり子 / [分科会テーマ] 土会活動と女性 / 環境共生住宅 / 健康住宅と素材 / 建築物の再生生活 / 歴史的な建物とまちなみ / 子供と住環境 / 高齢社会 / 集まって住む	出席者数...約350名
2012 (平成24年) 2月17-18日	第22回 京都	景観まちづくりからコミュニティの再構築へ —京都で考える 日本のまちと暮らし [報告] 「東日本大震災の現状報告 仮設住宅の現状と課題」 / 3-11 東日本大震災による被災と復興 / 宮城県における被災状況 / 東日本大震災の現状報告 / [講演] 高田光雄 / [分科会テーマ] 景観まちづくり / 環境共生住宅 / 健康住宅と素材 / 建築物の再生生活 / 歴史的な建物とまちなみ / 子供と住環境 / 高齢社会 / 集まって住む	出席者数...約500名
2013 (平成25年) 7月13-14日	第23回 東京	地域と共生する居住環境づくり —見直そう、これからの住環境と暮らし方 [講演] 天野 彰 / [報告] 「高齢者・障害者の居宅サービスの受給に適した住宅事例調査」進歩報告 / [活動報告] ユニバーサルデザイン研究会について / 地域防災における建築士の役割 — DIGの手法を用いて / [報告] 「被災地における現状報告と取り組み」 / 住まいの再生と住まいの再生 / 被災地宮城県における現状報告と取り組み / 考えよう! 明日を担う子供達のためのすまいづくり / 長野県栄村復興村営住宅プロジェクト / [分科会テーマ] 震災① 防災への取り組み / 震災② ボランティア活動の報告 / 歴史的建造物と建物再生 / 環境共生住宅と素材 / 景観まちづくり / 子どもと住環境 / 高齢社会 / 集まって住む	出席者数...約300名
2015 (平成27年) 2月25-26日	第24回 東京	未来へつなぐ住環境づくり —大切にしたい暮らし方 [講演] 「ネイバーフッドデザイン — 東日本大震災から学ぶ」よき避難者、を育成する防災減災、荒 昌史 / [事業報告] 在宅介護高齢者の住まいのあり方に関する調査事業 / 地域高齢者居住環境アセスメント等モデル事業 / [活動報告] 気持ちいい家をつくらう / 酒造とまちむすび / [報告] 「被災地における現状報告と取り組み」考えよう! 明日を担う子供達のためのすまいづくり / ふるさと再生と「記憶の中のすまい」 / 岩手県における2011年東北地方太平洋沖地震被害 / 災害に強いまち「清安」をめざして / [分科会テーマ] 震災① 防災への取り組み / 震災② ボランティア活動の報告 / 歴史的建造物と建物再生 / 素材と環境共生住宅 / 景観まちづくり / 子どもと住環境 / 高齢社会と福祉住宅 / 集まって住む	出席者数...約280名
2015 (平成27年) 9月25-26日	第25回 東京	未来へつなぐ住環境づくり —次世代へ伝えたい、こと・の・くらし [講演] 「全建女の立ち上げと仕事について」村上美奈子 / [パネルディスカッション] 「未来の居住環境とくらし方」門田真幸子、竹林のぞみ、内藤麻美、藤田淳子、永井香織 / [分科会テーマ] 震災① 防災への取り組み / 震災② ボランティア活動の報告 / 歴史的建造物と建物再生 / 素材と環境共生住宅 / 景観まちづくり / 子どもと住環境 / 高齢社会と福祉住宅 / 集まって住む	出席者数...191名

パネルディスカッション

未来の居住環境とくらし方

開催日時…2015年9月25日(金)、14:50~16:20

会場…国立オリンピック記念青少年総合センター 小ホール

パネリスト

門田真乍子 ■ (株)カラー集団 トータリア 代表取締役

内藤麻美 ■ 日本大学芸術学部デザイン学科

コーディネーター

永井香織 ■ 日本建築士会連合会 女性委員長

竹林のぞみ ■ 三井化学(株) 研究開発本部 R&D管理部 主席部員

籠田淳子 ■ (有)ゼムケンサービス 代表取締役、福岡県建築士会

長い歴史のなかで、
家庭＝女性の構図が定着しており、
女性が働くことが当たり前となった現在でも、
その構図がまだまだ残っているのが現状です。
「家」は、家族の生活の根幹であり、
その居住環境は長く議論されてきました。
居住環境ではハードからソフトへ、
さまざまな角度から研究がなされていますが、
働く女性が働く女性のために行っている
提案の形は、まだまだ少ないのが現状です。
そこで、このパネルディスカッションでは、
学生からキャリアを積まれた大先輩まで、
広い年齢層かつ異業種の方も招いて、
「くらし方」に焦点を当てて、
「未来」について考えてみました。

これまでの仕事や活動について

永井 今日、20歳代から80歳代までの、建築とは異なる異業種の方にもパネリストとしてご参加いただきました。

このパネルディスカッションでは、先ほどの基調講演のお話も踏まえて、3つのテーマについて話し合いながら考えてみたいと思います。3つのテーマとは、一つ目は「仕事と生活」、二つ目は「いまの生活について思うこと」、そして三つ目は「未来の暮らし方」です。

では、まずはじめに、皆さんの現在の仕事や活動について、簡単にお話いただけますか。

門田 私は、いま80歳です。結婚、出産を経て50歳で起業し、色にかかわる仕事を立ち上げました。

現在は建築の色彩の仕事が半分で、残り半分はパーソナルカラーや似合う色をコンサルする仕事を余暇に行っています。いまが一番幸せです。

竹林 私は現在、三井化学株式会社の研究開発本部でR&D(研究開発)関連の広報を担当しています。管理部門に移ってからは社内外のネットワークが爆発的に広がり、新しい企画が新しい出会いを生んで、日々、新鮮な気持ちで仕事をしています。

共働き生活は25年目に入りました。仕事でもプライベートでも、壁を乗り越えていくときは、いつでも苦勞を分かち合える仲間とともに助け合ってきました。

内藤 私は現在日本大学芸術学部の3年生で、建築とプロダクトデザインを学んでいます。特に、ユニバー



かどた・まさこ

(株)カラー集団 トータリア 代表取締役、日本色彩学会 名誉会員。建築色彩計画58年、パーソナルイメージコンサルティング29年の経験を持ち、日本建築仕上学会元理事、日本色彩学会理事を歴任。トータリアカラーアカデミー、カルチャースクールで後進の指導に心血を注ぐ。日本建築仕上学会学会賞(技術賞)受賞のほか、東京ビックサイトにて特別展示、総合プロデュースおよび講演を行う



たけばやし・のぞみ

三井化学(株) 研究開発本部 R&D管理部 主席部員。R&D関連の広報(Web、常設展示、パンフなど)とイベント運営(発表会、展示会)、各種学協会委員活動を行う。バイオ医薬品、微生物工学関連などに携わり、長く研究者生活を送る。その後、研究戦略策定や関連部署連携強化の仕事に従事し、2013年から現業務にあたる。25年目の共働き生活を迎え、多くのイベントを経験する。公私ともに壁を乗り越えるときはいつも、苦勞を分かち合える仲間との助け合いがある



ないとう・あさみ

日本大学芸術学部デザイン学科。元日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科。建築・生活デザイン学科時代の卒業制作を日本建築学会・千葉建築学会の展覧会に出展。千葉建築学会では奨励賞日本大学校建賞を受賞



こもりた・じゅんこ

(有)ゼムケンサービス 代表取締役、福岡県建築士会。ダイバーシティ経営=多様性のある人材が業績を上げるための環境整備、人財育成に取り組む。2013年内閣府「女性のチャレンジ賞」受賞、平成25年度経済産業省「ダイバーシティ経営企業100選」、平成26年度内閣府「女性が輝く先進企業」受賞、国家表彰は3年連続。JKDT女性建築デザインチーム スター代表。商業施設士会、北九州経営研究会、倫理法人会所属

サルデザインやバリアフリーを主として学んでいます。

籠田 わが社は、国家表彰という非常に名誉な賞を3年連続でいただいています。社員は9名で、地域の方や社員さんとともに、一人ひとりの夢が実現できるような経営スタイルをとってきました。

男で工務店の跡取りである兄とは真反対で、父は「女が建築に行って何になる!」と猛反対でした。母の支援で建築の道に進むことができました。

そんな父の様子が一変したのは、一級建築士試験に私が合格したときです。そして、父の会社を後継してからは、いままで私を支えてくれたのは職人さんであり、社員です。

ですから、多様性のある人材が業績を上げるための環境整備と、その人材を育成することを目的としたダイバーシティ経営を行っていこうと思いました。

ワークライフバランスについて

永井 仕事と生活というテーマを考えていくにあたり、ワークライフバランスで気をつけていること、もしくは工夫している点をお聞かせいただきたいと思います。

内藤さんは現在学生ですが、将来の仕事と生活に、どのような印象をもっていますか。

内藤 将来どのように仕事をしていけばいいのかを大学の先生方にお聞きしたことがあるのですが、そのときに、家庭、子育て、両親の介護という3つを両

立しながら仕事をしていくとなった場合、想像がつかないくらい厳しいものだと感じました。

永井 竹林さんは子育てと仕事を両立されていますね。どのようなことに気をつけていますか。

竹林 子育てと仕事を両立するためには、拘束される時間をうまく乗り越えることが課題です。私の場合、その解決にあたって大きな役割を果たしたのは、ベビーシッターの活用です。保育園が終わってから子どもの安全を確保するために利用しました。それと、もう一つ大きな役割を果たしたのが病児保育所です。

そのような外部の組織、機関、システムを十分活用しながら、仕事と生活の両立を図りました。

永井 病児保育所のような施設があるということが、ワークライフバランスをとるうえで重要だと言えますね。街のなかにこのような拠点があることの必要性を私も感じます。

籠田 建設業は一般的に7~8割が男性であるところが多いと思いますが、わが社は逆で、7~8割が女性で、2~3割が男性です。それが独自性を持たせていると思っています。

ワークライフバランスについては、わが社でも気をつけています。社員が一番やりがいを持ってやっていることは夢です。夢やビジョンを明らかにすることは、ワークライフバランスで重要なことなのです。

永井 真の夢、自分の夢は何か——。これからの会社や生活のあり方を見直すという意味で、それは必要ですね。

先ほど門田先生は、「いまが一番幸せ」とおっしゃられました。そのように言うことができる理由をお聞かせいただけますか。

門田 私の場合、富士山でたとえるならば頂上が見えているところにいる、まさに人生の最終楽章です。今日、この会場にいらっしゃる方々は50歳前の無我夢中で仕事も生活もやっておられる人が一番多いのではないのでしょうか。

私の場合も、夫の会社を支えた30年間は、自分に何ができるのかと考えながら、全力投球していました。体力も知力も精神力も溢れているときには自分の能力を全開にして、アンテナを張ることが大事です。

自分の好きなところが、一番の能力を発揮することができます。ですからその30年間は、PTAのことなどにも全力投球でしたし、会長や副会長職を務めながら、文章の書き方や人との付き合い方、企業との向き合い方などを勉強させていただいて、人に任せられる能力も身につけました。

子育ては、当時は保育園にお願いするというのが罪悪視されがちでしたので、肉親に子どもを預けました。でも、私は、子どもはプロに育ててもらったほうがいい子に育つのではないかと考えています。夫の介護と仕事の両方に向き合ったときは、介護は人にお任せして、私は夫の精神面だけを支えました。

自分を輝かせる、つまり外観も含めて、性格も恰好よくなってほしいと思います。そのためには自分を磨くこと、そして他人の意見を聞くことも必要です。

永井 普段から恰好よくなることを心がけていると、いまが幸せにつながるというお話であったと思います。

さて、ここで、初代連合会女性委員長の村上美奈子さんと神奈川県建築士会の大川副会長にお聞きしたいと思います。これからの働き方というものを考えてみたときに、意識の変化を感じることはあるのでしょうか。

村上 女性が多くなり、悲壮感がなくなっているの

ではないでしょうか。発言も認めていただける時代になってきているので、引け目の姿勢をとらなくてもいいのではと思います。

昔は、男性に対して反対意見を言うのは許されないという時代でした。でも、いまは、もっと楽しく仕事をしたいのではないかと思います。

大川 平成元年のときは、自営業の方や子育てを終えて社会復帰したい方が女性委員会で活動していました。一方、いまは皆さんキャリアウーマンで、素晴らしい才能もお持ちです。でも、自分の持っているスキルをお伝えしたいと思っている方の多くが会社員であるため活動がしにくく、女性委員会の運営に困ってしまいます。

永井 それは、会社や組織のなかで女性の役割が増加したことが要因の一つにあるように思います。

暮らし方で感じていること、 いまの住宅に対して思うこと

永井 次に、いま、暮らし方で感じていること、住宅に対して思うことについてお聞かせいただきたいと思います。内藤さんは、建築をめざそうと思い大学に入学されたわけですが、暮らし方や住宅に対する視点がどのように変化しましたか。

内藤 建築に入ろうと思ったきっかけは、アニメに登場するお姫様が住んでいるような家がとても印象に残って、私も将来そういう夢のあるような家をつくっていきたくて思ったからです。

でも、実際に建築を学んでみますと、そういう家を設計したときに、コミュニティという言葉が結びつかないのではないかと考えるようになりました。

最近は、家族のつながりを大事にしていきたいと思うように変化してきました。たとえば、秋田にある母の実家に帰ったときのことなのですが、和室で寝ていると襖越しに朝食の準備の音が聞こえ、人の温かみのようなものを感じることができました。自分がめざしている住まいは、こういうものではないかと思いました。

永井 いまの学生のなかには、和室で生活をしていない人も増えています。暮らしが徐々に変わっていく一方、普遍的に変わらない部分もあるのではないのでしょうか。そう思わせてくれるお話であったと思います。

門田先生はカラーという切り口で住宅を見ておられますが、どのようなことにお気づきされますか。

門田 村上先生の「すべってくらす生活」が、80歳になると身近になってきました。和の表現が、即、畳の生



写真1 籠田淳子氏(左)と内藤麻美氏(右)

活となると、それは段々難しくなっているのではないのでしょうか。

気密性のある住宅ではダニやカビの問題もあり、いままでの風通しのよい和の住宅とは違ってきています。どういところで和の心の文化を表現していくかということが、建築家の皆さまのこれからの一つの課題ではないかと思えます。

私自身は、色をプランニングするときに、大手の建築設計の方からは「グレーとベージュと茶色しかない」というようなお話をいただきます。それに赤や紫が入っているような色づかいは必要ですが、最終的にはグレーとベージュと茶色だと思っているわけです。

そこで、自分の家の壁面に71色の塗装をして実験してみました。色彩には人間に必要な色があり、建築に必要な色をきちんと踏まえたうえで、ピンクからグリーンまで、ブルーから黄色まで、赤から緑までという3フロアを、補色で27色、23色、21色を使いました。

その結果、どういうことが起こったかと言いますと、私自身が健康になりました。そこにいることが楽しいのです。また、床暖房を入れ、床をフラットにもしました。そして動線をできるだけ大きくして、裸足で動き回るのが、じつは、ボケ防止につながっているのではないかと思います。また、換気が大切だと考えています。

永井 たとえば病院の色は、最近では白だけではなく、部屋の色を暖色系に変えるという動きがありますね。色のことを建築の人たちがきちんと学んで、それを住宅や建物に取り入れていくことも重要ですね。

次に、竹林さんにお聞きしたいのですが、建売住宅では自分が思い描く家がないため、最終的に建築士に設計を頼まれたとお聞きしました。家づくりをするにあたって、どのようなことを要望されたのでしょうか。

竹林 共働きに便利な家が欲しくて、最初はモデルハウスを見て回ったのですが、そのコンセプトの家がありませんでした。ですから、建築士に設計を依頼して家を建てました。

こだわったのは、洗濯物を干す部屋があることと、24時間換気です。また、自分の身長にあったキッチンや水回りを計画していただきました。

建築士への要望は、突飛なものではなく、しかし他とは少し違うものを、とお願いました。その通りの家になりましたので満足しています。

ただ、家はできたけれども、そこで理想の生活が実現できているかという、そうではありません。私は片づいた空間に好みの家具を置いて、スタイリッシュでアーバンな暮らしをしたいのですが、実際にはそれが



写真2 門田真作子氏(左)と竹林のぞみ氏(右)

実現しない生活があります。なぜなら、そのような暮らしを望まない同居人たちがいるからです。私物を公共の場に持ち込むなど、彼らは雑然とした生活を望んでいて、それを快適に感じているようです。

望む生活像が異なる家族がいる場合、双方を満足させるようなデザインはあるのでしょうか。それが、真のユニバーサルデザインではないのでしょうか。ぜひ、プロの建築家にお伺いしたいです。

永井 いまのお話は、答えに窮するところがありますが、経験豊富な岡本副会長に教えていただきたいのですが、どのようにお考えでしょうか。

岡本 大変だろうなと思いますが、贅沢な悩みではないのでしょうか。とても幸せな家庭だと思います。自分さまざまな経営者と折り合いをつけていくのが仕事ですが、この問いに答えるのには、しばらく時間を要します。次元が違う場合は、どこかで折り合いをつけることが必要です。何よりも、幸せであることのほうが大事ではないでしょうか。

永井 籠田さんは住宅をつくる側におられますが、いまの住宅づくりにおいて、工夫している点をお聞かせいただけますか。

籠田 たくさん悩みはありますが、衣・食・住が住宅にはあって、たとえば家族は同じ服を着ませんし、食事も別々にとるようになってきています。

住宅をつくる側から感じる問題は、ダイニングキッチンや台所の歴史が女性の活躍の歴史でもあったりするわけですが、そこがなぜ生まれたのかということが答えではないでしょうか。たとえば、和室をつくるとしたら、その大きさを考えるのではなく、各部屋の時間のデザインができるのかどうか。それにより、住まいの悩みは解決できるのではないかと感じています。ここに、女性建築家の強みがあります。

先ほど、夢の話をするようにしようと言いましたが、この空間で何をしたいのか、どんな時間を過ごすのか、それをデザインして、ストーリーを立てて話を深めていけるかが重要なのです。そのためには一に取

納です。収納のセミナーをやらないといけないほどです。高さ、素材、耐久性、エネルギー、構造、設備、意匠がすべて関わってくるからです。

一方で、会社が持っている課題もあります。それは、自分には応えられるセンスがないと悩んでいる社員が、結構いることです。ここをとっても大事な経営課題としていますが、五感をデザインすることができるのかです。たとえば照明一つで、住まいや暮らしにおける心地よさを実現できるかもしれません。光を色でデザインすることで実現できることもあります。

多様化・多面化していく社会になっていったときに、つくる側は空間として住まいを考えるだけでなく、個から公に開かれていく住まいを内面的に考察すること、外への考察に向けて、いろいろな問題点や課題があるのではないのでしょうか。

永井 これからは、つくる側の意識も、ソフトやさまざまな手法を含めて取り入れながら変えていく必要があるのではと思いますね。

未来の暮らし方について

永井 最後のテーマになりますが、「未来の暮らし方」について考えたいと思います。このテーマで重要と思われることについて、まずはじめに籠田さんからお話していただけますか。

籠田 女性建築士にとって、建築という行為は幸せづくりです。その幸せとは、家族が幸せであるということです。建築は、子どもの未来をつくっているのだと考えれば、まちづくりが建築です。

福岡県建築士会では、北九州市が設営した「女性のための市民建築大学」の講座を1カ月開催し、女性委員会がその企画運営をしています。さまざまな年代の市民の女性が参加されていて、若い女性建築士も市民と一緒に参加し、女性建築士が講演をしながら受講生の方々とともに学んでいます。

北九州市の高齢化率は、政令指定都市のなかでもトップです。商店街の活性化も課題です。

商店街での取り組みの一つをご紹介しますと、女性建築士がリーダーとなり、車椅子に乗ってみんなで買い物しようという企画を行いました。普段、商店街には車椅子の人はまったく見かけません。お店はバリアフリーで設計されているけれども、実際はどうなのか。この企画をやってみて、目から鱗が落ちるほどの気づきがありました。それは何かと言いますと、結局、段差の問題よりも、みんなが声をかけて助け合い、相手を



写真3 パネルディスカッション風景

思いやることで解決するのです。心のバリアフリーを感じています。

家は、個としてのバランスをとるとともに、社会にどう開かれていくのか、その両方が暮らし方にとって重要ではないかを感じています。

永井 「心のバリアフリー」は、まさに考えていきたいものですね。

竹林 自宅で最期の医療を受けたいという人が少なからずおられます。それは今後も増えていくと感じています。そういう状況を見ながらこれからの住宅を考えてみますと、医師や看護師が家に来訪したり、あるいは24時間ヘルプをしていただくようなことがそのうち普通に出てくるのではないのでしょうか。経済的に裕福な方などのなかには、将来、医師を雇う人も出てくるかもしれません。それにどのように対応するか、つまり医師など医療従事者が作業する空間を持つ家が、今後出てきてもおかしくないのではと思います。

永井 プライベートと公の区別を住宅内ですること、それが介護にもつながっていきます。介護のための寸法設計は、トイレや廊下の寸法を広げるだけではないということも、これからは考えていかなければならないと思います。

内藤 住宅のユニバーサル化が進んで住みやすくなったとしても、人々の心が変わっていかないかぎり、介護や助け合いは難しくなると思います。

20年後は住宅のユニバーサル化が進み、家でも介護をして、私たちの介護の手助けとなるような家が出てきて、それが普及しているといいですね。さらに50年後は人々の心が変わり、まちなかでもユニバーサル化が進み、人々が満足して、車椅子の方が笑顔で暮らしていけるような世の中になっている、それが夢です。

永井 では最後に、今日は門田先生より『配色の手』を配布していただきました。この活用も含めまして、お話をさせていただきますか。

門田 高齢になりますとシルバーハウスに暮らしてい

る人が一番安心ですが、シルバーハウスだけでなく、小学校、幼稚園、若い人たちの家もあるようなコミュニティづくりを住まいの長期計画のなかに、ぜひ入れて欲しいと思います。知人とのシェアハウスも考えていきたいですね。

皆さんに配布した『配色の手』は、日本をはじめ世界の「自然・建築・人」の色の調査をもとに、多くの人を感じる快適色を選択基準にした配色表です。私たちは自然のなかで暮らしています。建築で使えるのは石の色、土の色と木の幹の色です。水の色や空の色は刻々と変化しています。そのような変化する色は使いません。『配色の手』は、色彩の知識をもたない方や専門家も、簡単に目的や用途、イメージに合った配色が行える配色選定チャートです。

基本的には、黒とグレーと茶色と白だけで色彩は間に合います。しかし、グレーにも赤みが入ったグレーがあったり、紫に近いグレーもあります。

『配色の手』は、大きくウォームとクールに分けてあります。暖かい色には黄色が入っていて、冷たい色には青が入っています。これをウォームカラーとクールカラーとよびます。この色彩の考え方は、洋服のほうから建築へ変化したものです。

2万人以上のアンケート結果から、皆が気持ちがいいと感じる配色を表にしましたが、日本人は同系を好みます。たとえばウォームはウォーム同士、クールはクール同士がよいと思います。石の色にもウォームとクールがあり、建築を考えるとときのヒントになると思います。

また、インテリアにも、もっと色を活かしてほしいですね。壁面に茜色を使ったときに、同系色しか置かないことにしたら、片づけ効果も表れました。多色も怖がらずに使っていただきたいと思います。

おわりに

永井 今日、「ワークライフバランス」と「いまの暮らしと未来の暮らし」という2つを主なキーワードとして、その視点でお話をさせていただきました。

内藤さんからは「コミュニケーション」というキーワードが出ました。未来の暮らしでは何が重要かを大学2年生にアンケートをしてみたところ、「快適で安全な暮らし」「環境」「デザイン性」といった回答が多かったのですが、学んでいくことで考えが変わるかもしれません。また、籠田さんからは「心のバリアフリー」というキーワードが、そして竹林さんからは、「本当の意味で



ながい・かおり
略歴はp.12に掲載

のユニバーサルデザインを」という、これからの建築のあり方を考えるきっかけをいただけたと思います。

門田先生からは、多くの色を取り入れてほしいというお話と、シェアハウスとシルバーハウスの考え方のなかには身内にとらわれない誰と住むかが大きな課題であるというお話がありました。竹林さんからお話があった介護に関する作業部屋の考え方、プライベートと公の場所の考え方、そういうことも取り入れた家族だけではないシェアハウスの考え方があるということを教えていただきました。学生のシェアハウスだけでなく、長期にわたるシェアハウスのあり方も、未来の暮らし方を考えるうえで必要なことだと思います。

ワークライフバランスは、建築士だけでなく、すべてに共通する女性の問題だと思います。いま、私たちが取り組むべき課題の一つです。現状に安住するのではなく、殻を破って、次の新しい時代に行くためには、いま、私たちがどうしたらいいかを考えていきたいです。

パネルディスカッションの打ち合わせのときに竹林さんが、「いまある環境は先輩がつくってくれたもの。私たちは後輩のために改革をしていくことが重要」とおっしゃっておられました。20代の人たちには、将来の子どもたちのために何ができるかということを考えてほしいです。みんなが次世代のことを考えて提案し、改革をしていくことで、世の中は、いまより少しずつよくなっていくのではないのでしょうか。

全健女の立ち上げのときに村上さんが苦勞をされたから、いまがあります。これからは、私たちが次世代の人々に何ができるかを、考えていかなければならないと思います。



写真4 会場風景

分科会報告

A分科会 参加者…27名

震災1 防災への取り組み

司会…鶴沢香織(千葉県建築士会)

アシスタント…金光朝子、元木啓子(同)

コメンテーター…菟理美登志(同)

3.11震災以降、千葉県では「状況把握」「避難所生活研究」「啓蒙活動」の3本柱で防災に対する取り組みを行っている。活動報告では、さまざまな事例を挙げて説明してもらい、啓蒙活動の一例として『地震いつもの備え』の作成・

配布があった。今後の活用が期待されるリーフレットである。

ワークショップでは、各県の防災に対する取り組みや悩みなどを挙げてもらった。地域による特色が現れており、たいへん興味深い内容であった。

全体を通して、地震対策以外にも各県の現状を考慮した活動が行われていること、啓蒙活動が多いことも印象に残る。平時における活動の積み重ねが必要と思う。(鶴沢香織)



A分科会ワークショップ風景



独自の防災リーフレット『地震いつもの備え』



研究・研修活動「ペットボトルを利用した簡易つい立」の制作

第1グループ	埼玉、高知、福島、 神奈川、千葉	・ハザードマップをもっと生かす。避難所の質の問題。 ・災害地での空き巣などに対する防犯対策も重要である。 ・外国人のための防災メールがある。
第2グループ	山梨、神奈川、千葉、 新潟、広島	・紙ぶるを使った啓蒙活動がある。 ・消火栓の市民利用が可能。雨水を利用した防災の取り組み。 ・行政との繋がりをもっと持つことが重要。
第3グループ	徳島、愛知、千葉、 神奈川、新潟	・HUG、クロスロードゲームなどを利用した啓蒙活動。 ・地震の少ない地域はなかなか対応が進まない。 ・木造仮設住宅のコンペに参加。
第4グループ	広島、大阪、山梨、 群馬、熊本、千葉	・ロケットストーブの制作。災害時用の残材をストック。 ・紙ぶる、クロスロードゲーム、HUG、ストローハウスの取り組み。

ワークショップのグループ別報告



3本柱の活動イメージ「いつも防災を考える樹」

B分科会 参加者…14名

震災2 ボランティア活動の報告

司会…島田マリ子(福島県建築士会)

アシスタント…雨森隆子(神奈川県建築士会)

コメンテーター…清本多恵子(宮城県建築士会)

住まいの記憶を聞き取りにする東京の女性建築技術者の会(女技会)のノウハウを生かし、4年半前、家を失った人々が、心を繋ぐ次の一歩のため、また集団移転による移転先の住まいの設計に役立てるように、記憶の聞き取りを開

始。女技会さんとともにNPOや学生さんを巻き込みながらの共同活動で、これまで18名の方々へ、「記憶の中の住まいの間取り図と聞き取り記録」をプレゼントした。

発表者は、「災害後に頼られる建築士になるためには、災害前から行政との協力関係を築いておくべき」と述べた。

参加者はこの発表で、「被災者のかつての生活の記憶を留め、未来につなげる重要な作業」と感じた。(島田マリ子)

- ・9月の鬼怒川氾濫で、耐震整備された防災拠点の新庁舎が浸水。避難してきた人々が孤立。
- ・阪神・淡路大震災を知らない子どもたちに、当時の記憶をつなぎたい。つなぐためのツールをつくりたい。
- ・南海大地震など今後危惧される災害について、ハード面の準備をしても、心が置き去り。
- ・一時的な災害があっても意識は風化する。災害時の日常生活を保つために、日頃のコミュニティ形成が重要と感じた。
- ・ニュータウンの契約書が次世代につなげない内容だった。長期目線で注視して欲しい。
- ・鳥取震災の記憶の聞き取りを個人で実施。何年か経たないと伝えられないことがある。
- ・日本の暮らし、地域の暮らしを伝えるため、子どもの頃に育った家を描く活動をしている。

参加者からの意見



「記憶の中の住まい」プロジェクトでは聞き取り成果として間取り図を描き起こした



聞き取った住まいをスケッチで描き起こし、成果品をご本人へ贈呈

C分科会 参加者…〇名

歴史的建造物と 建物再生

司会…熊谷友子(岩手県建築士会)

アシスタント…大坂久子(同)

コメンテーター…阿部えみ子(同)

「古い。もう使用していない。価値がない」というだけで取り壊されていく建築物がある。そのような建築物に付加価値を持たせ、「保存」と「活用」を両立させながら活動を続けている岩手県建築士会の阿部えみ子さんから、「昭和の木造校舎の保存活動から『なかなか遺産へ』と題して事例発表をしていただき、参加者と保存することの意義、活用の仕方、問題点や解決方法について意見交換を行った。

発表事例は、昭和26(1951)年に建てられた長さ119mの木造平屋建ての小学校(遠古袋小学校)にまつわる活動である。国内でも有数のその長い校舎は、半分を改修し、残りは解体すると決定されていたが、全体を残すことに



なかなか大学校「模型教室」

意義があるとして、地域住民を巻き込みながら保存活動を行った。住民への説明会や有識者を招いての講演会、明後日朝顔プロジェクトに参加し校舎を朝顔でいっぱいにする活動や、「世界一長いかもしれない遠古袋小学校で、日本や世界の最先端の学問に触れよう」と『なかなか大学校』を開校し、親子で参加できる勉強会を継続的に行った。

その結果、市民の理解を得て全面保存となり、現在はNPO法人を立ち上げ、活動を保存から利活用へとシフトしている。

発表を聞いた参加者からは、自分たちの取り組みの事例が出され、今後の活動の方向性や保存の難しさについての意見、問題点とし

ては耐震性、資金、活動している人の高齢化、引き継いでくれる人の人材育成などが挙げられた。その解決策としてケースバイケースではあるが、活動団体のNPO法人化、マスコミに取り上げてもらう、家族連れでの参加を促す、補助金の活用などが挙げられた。

取り組みの成果は、市民を巻き込んだ盛り上がりを見せたことが結束力につながったこと。さらに、今後の取り組みとして、年代が変われば考え方も変わるため、再生しても使う人がなくなることが考えられることや、建築士でなければ解決できないこともあるので、今後も意見交換ができる体制があればよいという意見で締めくくられた。(熊谷友子)

D分科会 参加者…21名

素材と 環境共生住宅

司会…本保万貴子(奈良県建築士会)

アシスタント…武市啓子(同)

コメンテーター…大泉みどり(山形県建築士会)

金山町の街並み(景観)づくり100年運動

1984年から始まった金山町の「街並み(景観)づくり100年運動」では、30年を経た現在、地域住民が参加するまちづくり活動が定着。金山杉を活用した金山型住宅と並行して、景観に配慮した公共施設を整備するなか、間伐材や加工による端材を利用した土木資材、水質浄化剤、木質バイオマスなど、山からの資源を余すことなく地域のなかで消費し、環境共生をめざした環境整備が経済を活性化した事例を紹介していただいた。

段ボールエコハウスの親子ワークショップ

子どもたちに自然の大切さや、ものづくりの楽しさを伝えようと始めた、山形県建築士会女性部委員会のワークショップ活動「親子で作ろう! 段ボールエコハウス」を報告していただいた。

地場産材の利活用について参加者からは、「県産材の利用促進には補助金を出すだけでなく、行政を巻き込んで地域を動かすことが重要」という意見があった。

環境と共生する住みやすい居住環境づくりをどのように取り組むか、どのように伝えていくかについては、「小さい頃からの意識づけが大事」「自分たちの仕事のなかでの勉強を継続」「本物を知る機会をつくって子どもに伝えていく取り組みが重要であり、今後はワークショップや出前授業を利用して、子どもだけでなく地域住民全体に、素材の本物を知ってもらうような活動を積極的に取り組みたい」との意見があった。

他にも多くの有意義な意見が出て、今後も継続したい題材である。(本保万貴子)



金山杉を活用した金山町の「金山型住宅」

親子で作ろう!
段ボールエコハウス

日時 平成27年3月9日(日)
時間 15:30~18:00(受付:15:00~)

会場 金山エコハウス(金山町)

主催 山形県建築士会女性部、山形県環境文化センター、金山町

協賛 金山町、金山町環境文化センター、金山町環境文化センター、金山町環境文化センター

お問い合わせ先 山形県建築士会女性部 事務局
〒980-0801 山形県山形市大町1-1-1 山形県建築士会 3階
TEL:023-622-1111 FAX:023-622-1112

「親子で作ろう! 段ボールエコハウス」

E分科会 参加者…21名 景観まちづくり

司会…磯中幸江(山口県建築士会)
アシスタント…水谷糸絵(同)
コメンテーター…加々良美雪(同)

山口県・福岡県両士会が10年にわたり共同で開催している「関門地区景観ウォッチング&セミナー」を報告していただいた。関門海峡を取り巻く景観について、歴史的建造物、まちの色彩、夜間景観など、毎年さまざまなテーマでセミナーを開催するほか、「五感で感じる関門景観・10選」の選定、委託事業として歴史



左…「関門地区景観ウォッチング&セミナー」でのまちあるき
右…平成25年度 都市景観大賞の景観教育・普及啓発部門で大賞を受賞。2県にまたがった地域の活動は前例のない受賞となった



業務委託を受けた引接寺ライトアップ社会実験

的建造物のライトアップ社会実験を行う、などの活動をされている。

学識経験者、建築士、学生、一般の方々と交えて、感じたことや意見を共有することで、景観について各々が再考し、取り組む契機になればと、活動を継続している。

後半は「関門地区景観ウォッチング&セミナー」の今年度のテーマである「屋外広告物」についてのワークショップを行った。屋外広告物のある景観写真を見て、「好き、嫌い」「圧迫感がある、開放感がある」などのいくつかの指標で評価し、チェックシートに記入後、グループでそれぞれの景観写真について、どこがそう感じるのか、なぜそう感じるのか、など意見を出し合った。「広告の形と色が整っていないのが気になる。少しの配慮で整ったものになるのではないか」「広告物をコントロールしたいとい



E分科会ワークショップ風景

う意識がないと、何を伝えたいのか、何を見せたいのかわからない」などの意見が出た。

チェック・整理し、他者の意見を聞くことで、改めて気づかされることもある。魅力的な景観の形成について考え、これからの地域活動に繋がる一助となる分科会となった。(磯中幸江)

F分科会 参加者…19名 子どもと住教育

司会…荒木由美(長崎県建築士会)
アシスタント…満原早苗(佐賀県建築士会)
コメンテーター…北村洋子(長野県建築士会)

これからの若者、特に建築を学ぶ学生を対象に、建築士への興味や憧れを持ち続けて欲しい、建築士の活動を知って欲しいという趣旨により長野県で始めた「信州環境ECOコンテスト」は、今年で8回目を迎えた。

そのテーマは、「県産材を使ったバスストップ」「地域ふれあいのポケットパーク」「地域循環型資源ステーション」「信州型駐車場」「避難所簡単間仕切り」「簡易トイレ間仕切り」「おもてなし家の空間 信州コンパクト住宅」など、じつに多様である。このコンテストや学生に授業を実施するまでの経緯や取り組み、そして、その成果について報告があった。

その後、「自分たちの地域を知ろう」という目的で学生に行った授業で使用したワークシ



授業時間を使い、5~6名の生徒に対し建築士1名がついてグループディスカッション

トを実際に使って、2グループでワークショップを行った。これは、地域の自慢できる風習・習慣を探し、その地域自慢を空間につなげ、そしてイメージしたものを表現するというものである。

一つのグループでは「風」をテーマに、風の持つ色・音・高さ・匂いから、各居室におけるイメージを膨らませた。別のグループでは「灰・粉じん」をテーマに、「サンルーム」を切り口として個の空間、家族の役割、住まい方、関わり方、みんなの空間へとつなげた。どちらのグループも、それぞれの持つマイナス面をプラスへと空間の発想を広げた。

高校生へのアンケートでは、30%が「建築士になりたい」、50%が「どちらかと言えばなりた



「信州環境ECOコンテスト」の2次審査は公開プレゼン。学生は「青年・建築士の集い」で発表する

い」と答えた。このような活動が少しずつ実を結んでいる。子どもたちにとって明るい未来となるよう、これからの考えるよい機会となった。

(荒木由美)



F分科会ワークショップ風景

G分科会 参加者…〇名

高齢社会と福祉住宅

司会…東 道尾(北海道建築士会)

コメンテーター…小川 慈(滋賀県建築士会)



ウッドテラスには車椅子で直接出ることが可能。毎日の生活に張り合いが生まれるようになり、孫としゃぼん玉遊びをする

「在宅介護に至るまで」と題し、自身の家族に起こった事例を報告。両親と一緒に建築士事務所を経営していたある日、父親がくも膜下出血で倒れ、高次脳機能障害と右片麻痺の後遺症により、重度の障がい者となった。家族と病院関係の専門職と何度も話し合いをして、在宅介護への決断となった。

家族の役割の変化、事務所の経営、両親の家の改修と、山積する課題を解決して、9カ月後に父親の退院を迎えた。この機に弟家族と同居となった2世帯住宅での暮らしは、父親だけでなく、おじいちゃんと同居する孫にもよい影響を与えることになり、リハビリの効果は想定外に向上した。屋外からのアプローチのために設置した木製デッキは、家族が集まる場ともなった。

住宅改修を実現するためには多くの条件をクリアしなければならないが、この事例では、

家族の結束が大きな力となったことを実証している。参加者からは、経済的な理由で改修できない事情や、地元での補助金制度や取り組みについての情報も紹介された。

最後は、コメンテーターより、「住宅は住む

人あってこそのものであり、住まい手の変化に応じて変化し、完成はない。建築士として、建物の余力を見極めながら、さまざまな専門職の意見に耳を傾ける姿勢も必要である」と、報告を締めくくった。(東 道尾)



改修により、ウッドテラスから寝室へ直接出入りができる動線を確保



寝室に続く納戸をトイレと洗面スペースに改修。これにより、寝室から直接トイレへ入れるようになった

H分科会 参加者…26名

集まって住む

司会…筒井裕子(愛知建築士会)

アシスタント…杉原尚子(同)

コメンテーター…横山眞理(東京建築士会)

日本最大級の集まって住むところの「多摩ニュータウン」で、シャッター通りと言われた鶴牧近隣センター(商店街)に事務所を開設し、地域と取り組んできた「商店街を元気にする」

さまざまな活動を紹介していただき、4グループでの意見交換をした。

2002年事務所開設の翌年、小さな商店街をコミュニティ・ビジネスで元気にしたいと、マスタープラン「つるまき・まちひろば計画」を策定。地域の仲間と「商店街をみんなが集まる地域の居間に、小さいけれどさまざまなことが起きる「まちの広場」にする活動が始まる。

行政とアダプトプログラム契約をした歩行者専用道路で草花・有機野菜を育てる「地域の庭」活動、事務所ではワンデー・シェフ方式の週末コミュニティ・レストラン、月2回の有機野菜マーケット「つるまきマルシェ」などを開催し、

地域を巻き込む活動を続け、12年が経過した。

現在、商店街はすべての店舗が埋まり、近年は若手が活動の中心になりつつある。ようやくゆるやかに次世代につながり、めざした「まちのひろば」としての賑わいが生まれつつある。

商店街に賑わいが生まれることで、人と人との会話が始まり、人と人がつながっていく。日本が抱える課題が同時多発している縮図と考えられている多摩ニュータウンのさまざまな課題も、人と人をつなぐ場があれば、解決策を見出していくことであろう。

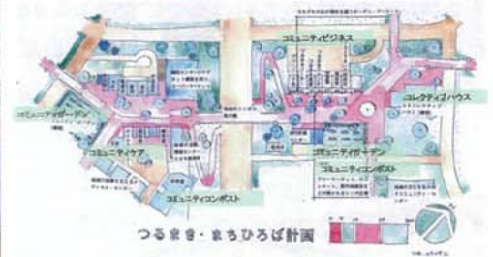
地域を見つめ、すべきことや求められることをやっていくという建築士の活動の原点を再考する分科会となった。(筒井裕子)



野菜が栽培されている「地域の庭」。子どもたちが散歩の途中でトマトを観察



事務所の一部を使ったコミュニティ・レストラン「カフェ・ドゥードゥー」



マスタープラン「つるまき・まちひろば計画」